

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第992号 平成27年9月3日

## ブーメランチルドレン

我が国では、自立出来ない大人が増えているように感じてなりません。

パラサイトシングルという言葉がありますが、現在、親と同居しながら親掛りで生活している20歳から49歳までの若者（49歳の人間を若者と呼ぶのも如何かとは思いますが）は、1000万人を超えるという調査結果もあります。

その原因としては、一言でいえば巣立ちが出来ないという事ですが、その背景には、就職が難しい、就職しても所得が低くて自立出来ない、更には他者とのコミュニケーションが上手く取れないし、結婚も難しい等々様々な要因が考えられますが、子離れの出来ていない親も少なくないように思います。

親の方が子どもを手放したくないと考えている場合には、何ともいいようがありませんが、大抵の場合、「自立して欲しいが、現実には難しいので仕方ない」と考え、半ば諦めの境地で子どもの面倒をみているというのが実態ではないかと思われます。

こうした傾向は、日本社会の特徴の一つと置いていましたが、アメリカにおいても、親と同居するパラサイトシングルが急増しつつあるようです。

私の印象では、アメリカという国は自立という事が殊の外重視されていると受け止めており、クラーク大学（アメリカ）の心理学者アーネット氏も、「個人主義や自主独立を尊重する北米等の人々は、高校卒業で親元を離れ、戻るのは不名誉という強い文化的信念を持って来た」といい、子どもが18歳になれば「役目終了」と考える親も多いと述べています（7月5日朝日新聞から）。

このように、アメリカではこれまで、親と同居しては一人前の大人とは評価されて来なかったのですが、最近では、そうした考え方自体が変わりつつあり、高校卒業後、一旦は大学進学等のために親元を離れてもその後再び親元に戻り親と同居する子ども達が増えているという事であり、アメリカではそういう子ども達を「ブーメランチルドレン」と呼んでいるのだそうです。

米国でも、大学を卒業しても正規の仕事を得るのが大変のようで、若者にとっては、実家で親と暮らすというのは非常に現実的な選択となっているようです。「寄生虫」を意味する「パラサイト」よりは「ブーメラン」の方が、幾らか明るく感じますが、アメリカの日本化といわれる所以でもあります。

精神科医の斎藤環氏によれば、「家庭を夫婦単位で捉える英米仏の場合、子が成人

すれば独り立ちする『家出』型が従来の自立モデルで、家族主義の日韓等儒教文化圏や、イタリアをはじめとするカトリック文化圏は『親孝行』型だ」とした上で、「家出」型であろうと「親孝行」型であろうと、社会に適合出来ない若者は何処へ行くかという、路上であればホームレス、家の中であれば引き籠りという事になると指摘しています。

こうした中、アメリカでは「家出」型の自立モデルが崩壊し、親と同居する若者が急増しているようです。そこには、自立したくても出来ず、止むを得ず親との同居を選択する若者が増えているということですが、同時に、「親との同居は大人じゃない」という意識が希薄になっているという、アメリカ社会の意識の変化も見て取れます。

日本の場合は、ホームレスが約1万人に対して、約70万人が引き籠りの状況にあるといわれており、大きな社会問題となっています。

その中には、就職出来るまでの緊急避難という若者もいると思いますが、中には、原因も分からず引き籠っているという若者も少なくありません。まさに、パラサイトという表現そのものですが、ただ、いずれのケースも、親が子を丸抱えしている事には変わりはなく、親に十分な経済力がない場合には、親子共倒れという事もあり得ますし、何より、親が死んだ場合には、引き籠っている子どもは路上に放り出される事にもなりかねません。

日本では、今後、若者の引き籠りよりも、ホームレス化の方を心配しなければならぬ時代が来るように感じられてなりません。

若者が自立し難い環境にあるというのは、日本だけではありません。欧米諸国も多くは職が得られず、自立したくても出来ないでいます。こうした状況の中で、若者の自立とは何かが改めて問われているともいえますし、若者達の自立を如何に支援して行くかは、焦眉の急といえましょう。

この問題を放置すれば、自立出来ない若者達の存在は、いずれブーメランのように、大人達への重しとなって還って来る事といわざるを得ません。

(塾頭 吉田洋一)